— 観 察 記 録 —

セアカモズ *Lanius collurio* の香川県初記録

古市幸士¹・曾根俊二²・遠山穎輔³・岩田篤志^{4,*}

¹ 香川の野鳥を守る会 〒769-0303 香川県仲多度郡まんのう町七箇 3168

² 香川の野鳥を守る会 〒760-0063 香川県高松市多賀町 3-14-2

³ 香川の野鳥を守る会 〒763-0054 香川県丸亀市中津町 403-2

⁴ 香川の野鳥を守る会 〒761-2305 香川県綾歌郡綾川町滝宮 2172-8

(2010 年 4 月 1 日受付；2010 年 7 月 7 日受理)

キーワード：初記録，香川，*Lanius collurio*，セアカモズ。

日本鳥学会誌

Japanese Journal of
Ornithology

© The Ornithological Society
of Japan 2010

Koji Furuichi¹, Shunji Sone², Eisuke Toyama³, Atsushi Iwata^{4,*}. 2010. The first record of Red-backed Shrike for Japan in Kagawa Prefecture. Jpn. J. Ornithol. 59: 189–193.

Key words: First record, Kagawa Pref., *Lanius collurio*, Red-backed Shrike.

¹ Kagawa Wild Bird Conservation, 3168 Nanaka, Mannou-cho, Nakatado-gun, Kagawa 769-0303, Japan.

² Kagawa Wild Bird Conservation, 3-14-2 Taga-cho, Takamatsu city, Kagawa 760-0063, Japan.

³ Kagawa Wild Bird Conservation, 403-2 Nakatsu-cho, Marugame city, Kagawa 760-0054 Japan.

⁴ Kagawa Wild Bird Conservation, 2172-8 Takinomiya, Ayagawa-cho, Ayauta-gun, Kagawa 761-2305 Japan.

1. 種名・観察個体数：セアカモズ *Lanius collurio* (亜種 *pallidifrons*?) 雄・第1回冬羽～第1回夏羽 1羽

2. 観察者名：古市幸士，曾根俊二，遠山穎輔

3. 観察日時・場所：2007 年 1 月 14 日～4 月 25 日，香川県仲多度郡まんのう町県立満濃池森林公園内駐車場付近 (34°9'N, 133°51'E) 標高約 160 m

4. 観察距離：約 10 m の距離から肉眼および 8 倍程度の双眼鏡，25 倍程度のフィールドスコープ等を用いて観察した。

5. 観察した環境：観察地は満濃池に隣接する県立満濃池森林公園の，花崗土を敷き詰めた駐車場である．周辺には人工的に植えられたと思われるソメイヨシノ *Prunus×yedoensis*，クスノキ *Cin-*

namomum camphora などがあり，地表はカタバミ *Oxalis corniculata*，セイヨウタンポポ *Taraxacum officinale*，ホトケノザ *Lamium amplexicaule* などが生えている。

6. 形態に関する記述：筆者らは同場所で 2007 年 1 月 14 日，2 月 4 日，6 日，8 日，3 月 17 日，4 月 10 日，15 日，25 日に観察・撮影し，例えば頭部が茶褐色の混じる灰色から淡い青灰色に至る状況など，換羽過程を確認した．また同様の種不明のモズ類を付近で観察したという話も無い．よって本個体は，同一個体とみなして差し支えないと考える。

そうすると，本個体は観察期間中に換羽が進行し，発見当初と渡去直前では羽衣が変わったということになる。

そこで，遅くとも 2 月 4 日には，換羽した尾羽が第 1 回夏羽の特徴を示し，後述するように各種の成鳥夏羽と比較できるようになったことをふまえて，便宜上観察期間を 1 月末日までの前期と 2

* E-mail: goisagi@mtb.biglobe.ne.jp

doi: 10.3838/jjo.59.189

JOI: JST.JSTAGE/jjo/59.189

月以降の後期に分けて記載する。各期間における本個体の特徴については、前期は1月中旬、後期は4月下旬の特徴を基準として、換羽中の過渡的な特徴を記載しないように努めた。

1) 観察期間前期 (図1)

嘴は太くかぎ状で、先端は黒く、基部は白色。虹彩は黒色である。頭頂部から後頸部は茶褐色の混じる灰色。太く黒い過眼線がある。背と雨覆は褐色で淡褐色の羽縁がある。三列風切は黒褐色と褐色のまだら模様であり、翼に白斑はない。喉及び腹部は白く、脇に細い黒色のうろこ状の模様がある。脚は薄い黒色。尾は全体に暗褐色で、最外側尾羽の羽縁は白い (図1)。

2) 観察期間後期 (図2~5)

嘴の先端は黒色で、上嘴から基部の上部にかけて薄くなり、会合線近くは灰色。下嘴は先端のみ黒色で、ほぼ灰色。虹彩は黒色である。額は白色で、頭部は淡い青灰色。黒く太い過眼線がある。背は茶褐色の混じる灰色で、上尾筒は青みを帯びた灰白色である。胸から腹部は淡褐色で、下腹部及び下尾筒は白色である (図2)。尾は茶褐色と黒色の縞模様で、最外側尾羽外縁と、各尾羽先端は白色である (図2, 3)。また外側尾羽基部には白

図1. セアカモズ幼鳥 (2007年1月14日。撮影：古市幸士)。

Fig. 1. The juvenile Red-backed Shrike observed at Mannou, Kagawa Prefecture, on 14 January 2007 (Photo by K. Furuichi).

斑がある (図4)。

7. 計測値：—

8. 種・亜種を同定した規準：

図2. セアカモズ第1回夏羽 (2007年4月25日。撮影：古市幸士)。

Fig. 2. The 1st Summer Red-backed Shrike observed at Mannou, Kagawa Prefecture, on 25 April 2007 (Photo by K. Furuichi).

図3. セアカモズ第1回夏羽 (2007年4月25日。撮影：古市幸士)。

Fig. 3. The 1st Summer Red-backed Shrike observed at Mannou, Kagawa Prefecture, on 25 April 2007 (Photo by K. Furuichi).

図 4. 尾羽の白斑 (2007 年 2 月 4 日. 撮影: 古市幸士).

Fig. 4. Tail with white sides at base (Photo by K. Furuichi).

図 5. 翼式 (2007 年 3 月 17 日. 撮影: 古市幸士).

Fig. 5. Wing Formula (Photo by K. Furuichi).

1) 種

本個体は、太くかぎ状の嘴、黒く太い眉斑のある大きな頭部などの形態的特徴から、スズメ目モズ科の鳥であることは明らかである。

(1) 観察期間前期の羽色からの検討

観察期間前期は全体的に褐色の幼羽が目立つことから、第 1 回冬羽の幼鳥と判断した。そこで 6. 1) の特徴に合致するモズ科の幼鳥を検討したところ、アカモズ *L. cristatus*, セアカモズ *L. collurio*,

オリイモズ *L. isabellinus* が考えられた。なおチゴモズ *L. tigrinus* も類似するが、本個体の肩羽には黒褐色の横斑がないことから一致しない。

そして、本個体の頭部には換羽により灰色の羽毛が見られるが、アカモズにはこのような羽色はないため一致しない。ただしアカモズの亜種シマアカモズ *L. c. lucionensis* の頭部には灰色みがあるため (Lefranc & Worfolk, 1997), これを除外することはできない。

また、本個体の尾羽は全体的に暗褐色である (図 1)。Mullarney *et al.* (1999) の図版によると、オリイモズ第 1 回冬羽の尾羽は通常赤褐色であり、個体差があっても中央尾羽周辺が暗褐色であるのみで、最外側尾羽は赤褐色である。この点から、本個体はオリイモズとは一致しない。

よって、観察期間前期の羽色からは、セアカモズまたはアカモズ亜種シマアカモズの可能性が考えられる。

(2) 観察期間後期の羽色からの検討

6. 2) に記載した特徴は、成鳥夏羽の特徴に近いと考えられる。また太く黒い過眼線から、本個体が雄であることは明らかであるため、各種の成鳥雄の資料と比較検討した。

まず本個体の頭頂部は青灰色であった。これはセアカモズの特徴と一致し、アカモズ及びオリイモズとは一致しない (Lefranc & Worfolk 1997)。ただしアカモズの亜種シマアカモズの頭部には灰色味があり (Lefranc & Worfolk 1997), 除外することはできない。

また観察時に本個体の翼に白斑は確認できず、写真でも白斑は認められなかった。これは、セアカモズとアカモズの特徴と一致し、オリイモズとは一致しない (Lefranc & Worfolk 1997)。

次に、本個体の上尾筒は青みを帯びた灰白色であり、セアカモズの特徴と一致する。アカモズは赤茶色、オリイモズは赤褐色であるため一致しない (Lefranc & Worfolk 1997)。

そして本個体の尾羽は茶褐色と黒色の縞模様で、最外側尾羽外縁と各尾羽先端は白色であり (図 2, 3), セアカモズの特徴と一致する (Mullarney *et al.* 1999)。アカモズとは全体が赤茶色、オリイモズとは赤褐色であるため一致しない (Lefranc & Worfolk 1997)。また本個体の換羽後の外側尾羽基部には全体として長方形に見える白斑があるが (図 4), これはセアカモズの特徴と一致する。アカモズおよびオリイモズにはこのような白斑はなく、一致しない (Lefranc & Worfolk 1997)。

Lefranc & Worfolk (1997) は、セアカモズ（基亜種 *collurio*）とオリイモズ（亜種 *phoenicuroides*）との交雑地域を3箇所、セアカモズ（基亜種 *collurio*）とオリイモズ（亜種 *speculigerus*）との交雑地域を1ヶ所示している。このうちセアカモズ（基亜種 *collurio*）とオリイモズ（亜種 *phoenicuroides*）との交雑個体（♂A）については図版に掲載しており、交雑個体の翼にはオリイモズに由来する小さな白斑が描かれている。しかし本個体の翼には白斑はない。また、アカモズとセアカモズとの交雑例も2例ある (Harris & Franklin 2000) が、本個体には交雑を疑わせるような特徴は見られなかった。

交雑個体は色の変異が大きい (Lefranc & Worfolk 1997) ことから、断定はできないものの、本個体が交雑個体である可能性は極めて少ないと考えられる。

(3) 翼式について

アカモズ、セアカモズおよびオリイモズは極めて類似する種であり、特に幼鳥については翼式をチェックすべきとされている (Svensson 1992)。アカモズとオリイモズの翼式は類似しており、P6, P7, P8 に外弁欠刻があり、P9 はP6 よりも明らかに短い (Lefranc & Worfolk 1997)。このうちアカモズのP9 はP4 とP6 の間であり (Svensson 1992)、オリイモズのP9 はP6 とP4 の間か (Svensson 1992)、P6 よりも短いという (Harris & Franklin 2000)。

一方セアカモズは、P8, P7 のみに外弁欠刻があり、P9 は短くてもP6 と同長で (Harris & Franklin 2000)、P6 よりも長く (Lefranc & Worfolk 1997)、P7 と同長の場合もある (Svensson 1992)。

まず本個体の外弁欠刻については観察時に確認しておらず、また明瞭に確認できる写真も得られていなかった。一方P9 とP6 については、伸びをした右翼を内側から撮影した写真（図5）をもとに検討したところ、本個体のP9 はP6 とほぼ同長か、傾きを考慮すればP6 よりも長いと見られる。この翼式はセアカモズと一致し、アカモズおよびオリイモズと一致しない。

以上のとおり、観察期間後期の羽色及び翼式から、本個体はセアカモズと考えられる。

2) 亜種

セアカモズは、おおむね4亜種が認められているが（例えばLefranc & Worfolk 1997）、おそらく単型とするのが妥当であろう、という意見が主流のようである (del Hoyo *et al.* 2008, Harris & Franklin

2000)。そのため、亜種を確定する意味はないかもしれないが、とりあえず現在得られている情報に基づき検討した。

まずセアカモズには、イギリスに分布する亜種 *justus*、ヨーロッパからシベリア西部および南コーカサスを除くアジアに分布する基亜種 *collurio*、シベリア西部に分布する亜種 *pallidifrons*、クリミア半島からイランに分布する亜種 *kobylini* がある (Lefranc & Worfolk 1997)。

基亜種 *collurio* の背は褐色であり、茶褐色の混じる灰白色である本個体には一致しない。また亜種 *justus* は基亜種 *collurio* より暗色であり、赤みが少ない程度の差であり (Lefranc & Worfolk 1997)、本個体には一致しない。また亜種 *kobylini* は変異があるものの、基亜種よりも背の赤褐色が鈍いか暗い (Lefranc & Worfolk 1997) ため、該当しないと考えられる。

残る亜種 *pallidifrons* の♂の上面は基亜種より淡く、特に頭部と頸で顕著である (Lefranc & Worfolk 1997)。また額は灰白色であり、上面はよりピンク味のある茶色である (Svensson 1992)。これらの特徴は本個体に一致する。特に額が灰白色である点は、本亜種のみ記載されている特徴であり、本個体にも見られる（図2）。そこで中国に生息するセアカモズの資料を確認したところ、背および肩羽などは茶褐色の混じる灰色に描かれており (MacKinnon & Phillipps 2000)、本個体の特徴と一致する。ただし同図のセアカモズ雄の翼には小さい白斑が描かれているため本個体に一致しないが、解説には小白斑について何も記載されていないため、同図は参考にとどめる。

以上から、本個体は総合的に考えて亜種 *pallidifrons* の可能性が最も高いと考えられる。

9. 観察した行動：モズ *L. bucephalus* と同様に、樹木に止まり、地上に降りて採餌した。筆者らの観察時にはモズのような尾羽を回す行動は見られなかった。また2月6日には、メジロの鳴き声を真似た“ぐぜり”を発していた。

10. 写真あるいは写真の有無：古市及び遠山が合計126枚の写真を撮影した。

11. 死体・標本保管場所：—

12. 過去の記録とその文献：日本鳥学会 (2000) では、本種の記録を採用していない。ただし真木ら (2000) は、「1994年11月に石川県舩倉（へぐら）島、1997年2月に与那国島で本種と考えられる記録がある」と記述している。

13. その他：Mackinnon & Phillipps (2000) によ

ると、中国に生息する亜種 *pallidifrons* は中央から東アジアで繁殖し、中国北西部を通過してインドやアフリカで越冬することである。本個体は翼や尾に磨耗は見られないことから籠脱けとは考えられず、南下時に迷行したものと考えられる。

セアカモズについては、正式な報告はないものの、「1994 年 11 月に石川県舩倉（へぐら）島、1997 年 2 月に与那国島で本種と考えられる記録がある」との記載（真木ら 2000）がある。このうち 1994 年の舩倉島の個体については、詳細な種の識別過程が森岡（1998）に記されている。これらの記録をふまえると、本個体は日本で 3 例目となる。

なお今回報告した個体は、豊嶋立身氏が 1 月 2 日に発見されたものである。投稿にご了解いただいたことに感謝する。同氏による最終確認日は 4 月 27 日とのことである。

本稿をまとめるにあたり、梶田 学氏、高木昌興氏、赤谷加奈氏、片岡宣彦氏には文献の収集にご協力いただいた。また匿名の 2 名の査読者の方と編集委員の橋本啓史氏には有益なご意見をいただいた。ここにお礼を申し上げます。

引用文献

- del Hoyo J, Elliott A & Christie D (eds.) (2008) *Handbook of the Birds of the World. Vol. 13. Penduline-tits to Shrikes*. Lynx Edicions, Barcelona.
- Harris T & Franklin K (2000) *Shrikes & Bush-Shrikes: Including Wood-Shrikes, Helmet-Shrikes, Flycatcher-Shrikes, Philentomas, Batises, & Wattle-Eyes*. Christopher Helm, London.
- Lefranc N & Worfolk T (1997) *Shrikes a guide to the shrikes of the world*. Pica PRESS, Sussex.
- MacKinnon J & Phillipps K (2000) *A Field Guide to the Birds of China*. Oxford University Press. New York.
- 真木広造・大西敏一 (2000) 日本の野鳥 590. 平凡社, 東京.
- 森岡照明 (1998) 新しい識別の試み 第 9 回 セアカモズ. *BIRDER* 12(1): 66–69.
- Mullarney K, Svensson L, Zetterstrom D & Grant PJ (1999) *Collins Bird Guide: The Most Complete Guide to the Birds of Britain & Europe*. Harper Collins, London.
- 日本鳥学会 (2000) 日本鳥類目録（改訂第 6 版）. 日本鳥学会, 帯広.
- Svensson L (1992) *Identification Guide to European Passerines*. Published by the author, Stockholm.